

Title	ジャータカの女性たち
Author(s)	大西, 美保
Citation	印度民俗研究 別巻. 1987, 4, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50356">https://hdl.handle.net/11094/50356</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ジャータカの女性たち

大西美保

## 目 次

1. 行者の息子が女にかどわかされる話 ( 4 7 7 = 3 4 8, 1 0 6,  
4 3 5, 5 2 6, 5 2 3, 4 2 3, 1 6 7 )
2. 行者が女に迷って通力を失う話 ( 6 6, 2 5 1, 4 3 1, 2 6 3,  
4 9 1, 3 4 )
3. 女が盗人に恋をする話 ( 6 3, 1 9 3, 3 1 8, 4 1 9, 3 7 4,  
4 2 5 )
4. 毒婦が聖人を陥れる話 ( 1 2 0, 4 7 2, 5 2 7 )
5. 人妻が浮気をする話 ( 6 4, 6 5, 1 4 5 = 1 9 8, 1 9 9,  
2 1 2, 4 0 2, 4 8 1, 4 0 1 )
6. 娘の操を試す話 ( 1 0 2 = 2 1 7 )
7. 十六娘の垣は出来ぬ、という話 ( 6 2, 2 6 2 )
8. 夫を助ける貞女の話 ( 1 9 4, 5 1 9, 2 6 7 )
9. 夫婦でありながら夫婦でない話 ( 3 2 8, 4 4 3, 4 5 8,  
5 3 1 )
10. 女を思って地獄へ落ちる話 ( 1 4 7 = 2 9 7, 3 4 = 2 1 6 )
11. とりのこした話を集めて
  - 花輪がとりもつ縁の話 ( 4 7 9 )
  - 王が子供を認知する話 ( 7 )
  - ナツメ売りが王妃になってナツメを忘れる話 ( 3 0 6 )
  - 愛しい相手を蹴とばした牝驢馬の話 ( 2 6 6 )
  - 老いらくの恋狂いの話 ( 6 1 )
  - 性悪の嫁に苦しむ姑の話 ( 4 1 7 )
  - 夫よりも息子よりも兄弟が大事、と言った女の話 ( 6 7 )
  - 男を喰い殺す夜叉女の話 ( 1 9 6 )
  - 鶏をだませなかった猫の話 ( 3 8 3 )
  - 蓮から生まれたふしぎひめの話 ( 3 8 0 )
  - 女嫌いの王子が恋狂いを始める話 ( 2 6 3 = 5 0 7 )

( )内は説話番号

アンダーラインをひいたものは類型

=は筋は同じで領などが少しちがうだけのもの

## はじめに

古代において僧の修行の妨げとなる最大のものが女犯であったろうことは容易に想像しうる。従って仏典ジャータカが女性を主題にとりあげる時は、ほとんどその邪悪を説くことになる。又、女性そのものを悪としない場合も、官能にひきずられることの恐しさを強調しており、いずれにしても女には近づくと勿れ、というのがその趣旨である。

ジャータカはすべて仏陀である大師 (Satthā) が自らの前世を物語る形になっている。大師がどのような状況でその話を語られたか、を記した部分 (いわば話の枕にあたるので仮に「枕」と呼んでおく。)、大師の語る過去の物語 (本生譚、以下「枕」に対して「本」と記す。) 本生譚中の登場人物が現在の誰の前世の姿であるか、を明かす結びの部分 (仏教説話としてのジャータカを考えてゆく上では非常に重要な意味を持っているが、この小論ではとりあげない。) の三つの部分から成るのが普通である。

女犯を戒めることを主題とする場合の「枕」には愛欲にとらわれて心の平安を失った比丘が登場する。浮世を捨てる前に連れ添った女房が恋しくてたまらなくなる (特にその手の柔かさが忘れられない、と訴える場面が多い) か、托鉢中に美しい女を見て忘れられなくなるかして情欲に駆られ、戒律を破ったり、還俗を望むようになる。髪や爪が長く伸びて衣の汚れがひどくなる。そこで仲間の比丘が大師に告げたり、無理にひっぱって連れて来たりする。(他の比丘の破戒を知ったものは注意を与えたり、僧団に報告する義務がある。) 大師は直接真偽を問い正した上、女の邪悪や恐しさ、官能を満たそうとすることの空しさを説くために、本生譚を語ることになる。比丘ではなく、妻の不貞に心を痛めたり、妻の死を嘆き悲しむ優婆塞が登場して大師の教えを乞うこともある。

しかしながら、このようにして語られる本生譚は、かなりの娯乐的或いは文学的といってもよい要素をもっており、時にはそれが「枕」の部分の趣旨とはちがはぐなものもある。その理由の第一は、ジャータカが当時の民間説話、小咄の類いをあまり変形もせずに取り入れたためであろうし、又、たてまえはともかく、こういった説話 (ジャータカ、その他) が在家、出家を問わず、日常生活の中で娯楽としての大きな意味を持っていたこともあるだろう。更に、いくつかの話では、文学への志向が抹香臭さを押しつけて幅をきかせているように感じられるのだが、この点に関してはどこまで自分の感覚に頼ってよいものやかわからない。ただ確かなのは、これらの古い物語が今の自分の想像力を刺激する、ということであろう。

正確に考えてゆこうとすれば、仏教の教義と照らして、又、インドの歴史の流れの中でとらえねばならないところであるが、それはできない。ここでできるのは、女性を主題とする話をジャータカ中から拾い、類似した話をまとめてみることにせざるを得ないが、娯楽、文学としてながめた気楽にして罰当たりな感想を少々加えてみたい。

時間的にも空間的にもかけはなれた場所から、おぼろげな鏡を使って視見

する心地で、目に見えたものも或いは自分の目の歪みかも知れず、どれほどの意味があることなのか疑問とは思う。

テキストは V. Fausboll の "The Jātaka" (Pali Text Society, 1963) を使用し、E. B. Cowell の "Jātaka Stories" を参照した。

本文中の登場人物はほとんど名前が与えられているが簡単のため単に「行者」「女」「王」などのように記した。

## 1. 行者の息子がかどわかされる話

人里を遠く離れた山中で行を続けていると女が現れて誘惑しようとする、という話であるが、ジャータカ中では一定の型をとる。№477の Culla Nārada J.<sup>(1)</sup> を中心に考える。

枕 Sāvattthi に美しい娘があり、十六才になった（成人した）が、結婚相手がない。母親は思案の末、比丘を誘惑することを思い立つ。僧にはなったが戒律の多さに嫌気がさして、姿形ばかり気にかけるようになった伊達男に白羽の矢が立つ。母娘に誘惑されたこの比丘は大師に還俗を願い出るが、大師は以下の話をして悟す。

本 Bodhisatta<sup>(2)</sup> はバラモンの家に生まれ、妻を娶るが、妻は子供を残して死ぬ。（或いはお産で死ぬ、と考えた方がいいかもしれない。）Bo.は世をはかなんで息子を連れて出家する。ある日、Bo.の留守に、盗賊の根城から逃げてきた娘が庵に辿りつく。息子を誘惑して一緒に村へ逃げよう、と言うが、息子は父に告げてから、と答える。娘は父の帰るのを恐れて先に行ってしまう。Bo.が帰ってくると息子は薪も水も用意せずにぼんやりすわっている。父は娘の足跡を見て事情を知る。山を降りよう、とする息子にBo.は人の世の偽り多きことを語って改心させる。

№106 (Udañcāni J.) ではBo.は息子の心を今変えさせるのは無理だろう、と強いて止めない。息子は女のあとを追って村へ行ったが、女は肉を買ってこいだの、魚を買ってこいだの、入用になるものをいちいち買いにゆかせた。そこで息子は「奴隷か下男のつもりでこき使いやがる」と逃げだして父のもとへ帰る。

幸わせだったこの僕を  
水がめ女<sup>(3)</sup>が苦しめる  
妻になるとは口先ばかり  
油だ塩だとこきつかう

こまかい買物に使われては男がすたる、ということらしい<sup>(4)</sup>。ここで、息子に対してBo.が、「それはそうだが、親切心と憐れみを欠いてはならぬ」と説くところがこの一連の説話の中では一風変わっている。悪女に対して非常に厳しい罰を与えているものもあるが、この話のように、「男を誘って我物にすると今度は自分のためにあごで使い出す」女の性を仕方がないもの、憐れむべきもの、とあきらめてものわかりのよいところを示す話がかかなり多い。女性蔑視の度合はむしろきついかもかもしれない。

№435 (Haliddirāga J.) は№477とほぼ同じであるが、女が息子に対して「山の中の何一つ誘惑のないところで守る戒に意味はない。誘惑の多いところでそれを断ってこそ尊い、というもの」と述べる。この理屈は行者を誘惑する常套手段で、あちこちで使われている。№348 (Arañña J.) は№477の大筋のみを記している。

№526 (Nalinikā J.) はある雌鹿が行者(Bo.) が用を足す場所でのその精液の交った水を飲んだり、草を食べたために、やがてBo.の子を生む。

Bo.が事情を知ってその子を育てる。Bo.とその子 Isisingaの力の強くなることを恐れた Sakka<sup>(5)</sup>が Kasi の王をだましてその王女に Isisingaを誘惑させる。王女はBo.の留守に若い行者の姿で現われ、生まれてこのかた女というものを見たことのない Isisinga をだまして戒を破らせる。帰ってきた父は息子から若い僧と遊んだ話を聞き、事情を知る。父が女の恐しさを説くと、息子はあれは夜叉の女だったのだ、と思い、又修業にはげむ。行者姿の王女が手まり遊びをしながら庵を訪れ、ふざけているうちに Isisingaと交わる場面、又、そうとは知らぬ Isisinga が女や父とかわす無邪気な言葉などは艶笑小咄として演出されたことと思う。

㊦ 5 2 3 ( Alambusā J. ) は ㊦ 5 2 6 にほぼ同じだが、Bo.亡き後、Sakka が二千五百万の天女のうちもっとも美しい女を Isisinga のもとへ送り、墮落させることになっている。Isisinga は女に誘惑されて戒を破り、三年共に暮らす、三年目に、「女は花のように美しいが近づいてはならぬ。」という父の教えを思い出して反省し、女を去らせる。Sakka の命をうけた天女が始めから乗気ではなく、首尾よく墮落させて帰った時も、何でも望みのものを、と言う Sakka に対し、もう二度とこんな仕事をさせないでほしいというのが望みだ、とピシャリとはねつけるところがユーモラスである。

この類型からは、はずれるが ㊦ 1 6 7 , 4 2 3 も行者を誘惑する女の話である。

㊦ 1 6 7 ( Samiddhi J. ) 朝日の中で水浴する行者 ( Bo. ) の姿を見て、そのあまりの美しさに恋をした女神が誘いかける。

この世の楽しみを御存知ない方よ、  
さあ楽しみましょう、今こそがすべて

Bo.の返歌

死の時はいつ来るかわからない  
私は行を続けよう、今こそがその時

㊦ 4 2 3 ( Indriya J. ) の枕にはもとの妻に誘惑される出家の話が出てくる。妻のもとへ托鉢に来た比丘に妻は引越しの用意を見せ、「女は主人なしでは生きられない。あなたには不義になるが、遠くへ行って他の男と暮らすから勘忍して頂戴」と泣く。男を引戻すための策である。男は一度は還俗を決意するが、大師に悟される。出家者にとってもとの妻を忘れることのむずかしさ、女にすれば夫に出家されることの辛さがよくわかる話である。㊦ 4 2 3 の本生では、古の聖人たちの名を挙げて、官能に囚われることの恐しさ、空しさを説く。

## 2. 行者が女に迷って通力を失う話

㊦ 6 6, ㊦ 2 5 1, ㊦ 4 3 1 は、王妃に情欲をおこして苦しい思いをした行者の話である。

㊦ 6 6 ( Mudulakkana J. )

枕 Sāvatti に住む若者が出家したが、ある日托鉢の途中で美しく着飾った女を見て欲情した。以来心の平安を失って獣のようになってしまい、爪、体毛が長く伸び、衣の汚れもひどくなった。仲間の比丘が気付いて大師のもとへ連れてゆく。大師は「Bo.ですら女の隠所<sup>(6)</sup>を見て禅定を失った。須弥山をひっくり返すほどの大風が象ほどの小山を、大閻浮樹を根こそぎにする大風ががけっぶちの小木を、大海を干上げる大風が小池をものともしないのは言うまでもない。おまえが愛欲に苦しむのは無理もない話だ。如何に清浄なものも女によって汚れるのだから。」と説く。

本 Bo. は富裕なバラモンの家に生まれたが出家してヒマラヤで暮らした。ある時、酢と塩を求めて<sup>(7)</sup>山を降り、ベナレスへやって来た。托鉢して王宮の門へ来ると、王は行者の姿に貴いものを感じて大切にもてなし、王宮の庭園に住んでくれるように頼む。行者は承知してそこに十六年間暮らす。十六年目に王は国境におこった争乱を平定しに行く。王が留守の間、王妃が行者の世話をすることになったが、ある日、行者が食事に時刻になってもやって来ない。王妃が寝椅子でうたた寝をしているところへ行者が現われ、あわてて起き上がった拍子に衣がするりと落ち、裸身を見せてしまう。行者は湧き上がる情欲を抑えられず、食事もとらずに羽をもがれた鳥のようになって寝込んでしまう。王が帰ってきて行者の様子に驚き、行者の告白でわけを知る。王は王妃を行者に与えるが、王妃には行者を救うように、と密かに命じる。王が新夫婦に与えたのはもと公衆便所<sup>(8)</sup>として使われていた建物である。王妃は行者に中を浄めさせ、椅子やら寝具を持ってこさせる。さんざんこき使ったあとでいよいよ床入となった。王妃は行者のひげをつかんで「御自分が出家であることもバラモンであることもお忘れにならなきやなりません、ようございますか。」と自分の顔の正面に行者の顔を引寄せた。この時に行者は我にかえり、再びヒマラヤへ帰ってもう降りることはなかった。

行者と王妃の取合わせが愉快で、王妃の裸身を見てしまうところ、床入のあたりははらはらさせるし、王妃が貴いはずの行者をきりきり舞させて最後にやり込めるところは笑いと拍手喝采をよんだことだろう。

№ 251 ( Samkappa J. ) は国境から帰った王にわけを尋ねられて、告白し、自ら恥じてヒマラヤへ帰ることになっている。王宮から戻ってきた行者が、「ああ女よ、愛らしいあの手、あの足、あの腰、あの腿…」とうめく場面、手もつけない食事にまっくろに蠅がたかる、という描写に迫力がある。行者に「怪我をした」と言われた王が傷口のないのを不審がると、「傷をうけたのはこの心」と答えるあたりもおもしろさへの配慮が見られる。

№ 431 ( Hārīta J. ) では王妃の裸身を見た行者 ( Bo. ) がそのまま王妃の腕をつかんで「世の中のこと」を行ってしまう<sup>(9)</sup>のであり、その後毎日王妃と密事を続けて都中のうわさになる。大臣が王に知らせて寄こすが王は信じず、帰って王妃に質してなお信じず、直接行者に問うてやっとうわさが本当なのを知る。行者は深く恥じてヒマラヤへ帰る。王が行者を歓待し、その説教を貴ぶ話は数多いが、この話は極端な例であろう。僧たちによれば



王侯はこのようにあるべき、ということになる。Bo.の不品行過ぎるのも珍しく、王の方をBo.にする方が説話としては自然なようだが、*㊦66*や*㊦251*が更に露骨になった話。説話が語られる時には、語り手の趣味やその場の雰囲気によってこの程度の改作（あるいは改悪）はされていたろう、と思える。

*㊦263* (*Cūḷapalobhana J.*)の後半にも情欲をおこして通力を失う行者の話が出てくる。ある王子(Bo.)がわけあって娘と森で暮らしている。王子の留守に行者が娘のもとへ来る。帰ってきた王子を見て空を飛んで逃げようとするが汚れのために力を失っていて海へ落ちる。王子は行者を助け、女犯の害あることを知って娘を去らせる。

*㊦491* (*Mahāmora J.*)はヒマラヤに隠れ住んだが雌の鳴き声につられて獵師に捕えられる金色の孔雀の話。

*㊦34* (*Maccha J.*) *㊦216* (*Maccha J.*)は雌の魚にうつつをぬかしている間に網にかかる魚の話でいずれも趣旨は同じである。

### 3. 女が盗人に恋をする話

先にとりあげた説話ほど定まった型はないが、盗賊と女をからませた話が幾つかある。いずれも話のテンポが速く、裏切り、騙し合い、情痴と現代にも通じる要素と、古代の感覚の肌理の荒さを同時に感じさせる。

女が盗賊と出会って心を惹かれ、恩のあるもとの夫(遊女の場合には定客)を裏切る、というのが共通の大筋でそのさまざまなバリエーションとして見ることができる。

「枕」で大師が言うように、「女は如何に恩知らずで信用ならないか。」を語るのが説話の趣旨である。( *㊦419*は筋は同じながらこの限りではない。)裏切られる男の善良さ、女に対する思いやりが描かれた後で、対する女の冷酷さ、気まぐれ、男を欺いて死に追いやる際の言葉の巧みさなどが対照的に配される。

*㊦63* (*Takka J.*)行者(Bo.)が川を流されてきた娘を助け、助けた娘に誘惑されて夫婦になる。村でTakka<sup>10</sup>を売って女を養ったが、ある時盗賊が村を襲い、女を連れ去る。女からの伝言で盗賊の部落へやって来た行者は、女に謀られて盗賊の頭に殺されかけるが、いくら殴られても「情知らずの恩知らずめ、悪どい奸婦め」としか言わないので盗賊は不思議に思っただけを聞く。話を聞いた盗賊は行者を殺すようにみせた刀で女を真二つに切る。行者は「家庭にはもうなんの未練もない。」と再び出家し、盗賊も行者に従って山へ入る。

*㊦193* (*Culla-Paduma J.*)わけあって妻と共に森で暮らす王子(Bo.)が川を流されてきた両手両足耳鼻を削がれた盗人を助けて手当する。妻は夫の留守に盗人と関係し、邪魔になった王子を谷へつき落とす。王子は木にひっかかって助かり、後に王となる。王は盗人を籠に入れて乞食をする妻に再会する。

*㊦318* (*Kaṇavera J.*) (*Sulasā J.*)はほとんど同じ筋であり、町

中で鞭打たれながら引立てられてゆく盗人の姿に高樓の窓からそれをながめた遊女が恋をする。客の命とひきかえに盗人の命を救うが、やがて盗人は女を殺して装身具を奪って逃げようと企てる。Bo.が盗賊の役となる№318では女を殺そうとする意志はほかされていて女を抱き締めて気絶させるだけなのに対し、№418では盗賊は悪役で残忍な気性が強調される点など、民話がジャータカに使われる際にどの程度の変形をされているか、登場人物にBo.をあてる場合にどの程度の配慮がなされたか、が伺われて興味深い。

№374 (Culla-Dhanuggaha J.) は弓の名手(Bo.)が師匠の娘を嫁にもらって故郷へ帰る途中、山中で盗賊に襲われる。山賊の頭と組み合った夫に刀をくれ、と言われた妻は、柄を山賊に刃を夫の方へ向けて渡す。夫は死に山賊の妻となった女を今度は山賊が騙し、装身具を奪って逃げる。

№63, 318, 374などの盗賊は、「自分に親切だった者を裏切って見知らぬ俺につくぐらいの悪女だから、今度はこちらの身が危い。」という理屈で女を殺したり、逃げ去ったりする。(№418では盗賊は悪役だから弁明抜きである。) №374ではSakka(Bo.)が登場して、肉を銜えたジャッカルが池から飛び跳ねた魚も捕えようとして結局どちらのものがしてしまう、という皮肉な芝居を見せて、夫と情夫の両方を失った女をからかう。(教え悟す、とあるが嫌味を言いに来たとしか思えない。) 女が自分の誤ちに気付き、「そのとおりで、新しい夫を探して良い妻になろう。」と決意すると、Sakkaは「土の壺を盗んだ者はそのうち真鍮の壺を盗むようになる。夫に悪事をはたらいた者はいつかもっと悪いことをする。」と言い捨てて去る。№193では「夫を裏切った」ことで女と情夫が厳しく批難されている。女の顔に気付いた王は、「こいつはあの女だ、こいつはあの男だ。」と叫び、

この極道を棍棒でたたきのめせ、  
人妻口説いた根性腐れ奴、

この売女は生きてまま耳鼻削いでくれよう

と女と情夫を呪うが、怒りを解いて刑を減じ女の頭に二度ととれないように籠を取り付け中に男を入れて国から追い出す。このあたりもやはり王がBo.であるための配慮であろう。

それぞれの話に(№419はのぞいて)女の気まぐれ、性欲の強さ、欺瞞を批難するもっともらしい頌(gāthā)が挿入されているが、話の内容に合って効果的なものは少ない。「命を救ってやったものに裏切られる話」として全体をまとめてみることもできる。№193, 318などでは自らの色恋<sup>(1)</sup>に最後まで忠実な女の姿に哀れと美があるようにむしろ思える。№318で男に殺されかけながら、そうは思わず、再び男に会えますようにと、食事<sup>(2)</sup>や上等の衣服、寝台を断って毎日祈る遊女、旅芸人に託す男への恋唄、№193の両手両足のない愛人を柳の籠に入れて背負い、物乞いして歩く女の姿には愛しいものがある。№193は前半、城を追われて森へ入った七人の王子が、自分たちの妻を毎日一人ずつ殺して食う場面、弟達のもとを逃げた最年長の王子が水を欲しがらる妻に自分の膝を切って血を飲ませる場面、両手

両足耳鼻のない罪人と妻が交わる場面、正邪の感覚を越えてグロテスクであり、ジャータカの趣旨におさまりきれぬはずもない強烈な話である。六人もその夫たちによって殺されて喰われてゆくのは、自分もその肉を喰った女が狂女となって夫を憎み、肉塊に近い罪人に偏愛を示した、と解釈すればおもしろくはあるが、天井の木目に人の気配を感じるようなものだろう。

㊦ 4 1 9 は女を批難したものでなく賢明で力持ちの女丈夫をむしろ賞めている。ある女中が男（正体は盗人）に公園<sup>(13)</sup>で誘われ、その夜皆が寝静まってから逢引したが男が自分を殺して女主人から頂いた装身具を奪おうとしているのに気付き、逆に井戸へつき落とし、レンガを投げ込んで殺してしまうという話が枕。本文では男に谷へ落とされそうになった遊女が逆に男をつき落とすことになっている。崖の上で女は、「私の心と体が覚えている限りあんたほど愛しい男はない、もう一度だけ抱かせて頂戴、もう二度と顔も見られないのに。」と男に近づく。このまま男と無理心中ということにはならないので、別れの仕草と見せて背をひつつかみまっさかさまに谷底へ投げ込むのである。こなごなになった男を見て山にすむ神<sup>(14)</sup> (Bo.) が女も時には賢明である、と感心して頷をよむ。山を降りた女が召使いたちに男の行方を尋ねられて「私に聞かないで」とさりりとかわして都へ帰るところも独得である。（ジャータカには心中またはあと追ひ自殺は一件もないようだ。）㊦ 4 1 8 と同じ筋書ながら、一方の遊女は女の悪を説くのに使われ、一方は賢明を説くのに使われているのであるから、そのあたりの臨機応変に感心させられる。

㊦ 4 1 9 の遊女は「もしもあの逞しい男を救うことができたならこんな汚れた仕事をやめて一緒に暮らそう。」と考えるし、㊦ 3 1 8 の遊女は、偽りではあるが「弟は私の仕事を卑しい、と蔑んで近寄りもしなかった。」と客に向かって訴えている。遊女の話は㊦ 4 2 5 (Atthāna I.) にもみえる。豪商の息子が名高い遊女のもとへ毎夜千金を持って通いつめていたが、ある日都合で金を持参しなかった。あした二千金を払うから、と言うが遊女は「私は遊び女だから金なしには遊ばない。」と門前払いをする。女に嫌気がさした男は出家する。男とは親友の間柄の王がうわさを知って遊女を叱りつけ、男を連れ戻しに行かせる。男は遊女のかつての無礼を許すが、一緒には帰らない。もしこんなことがおこったら一緒に都へ帰ろう、とあり得ないことばかりの歌を唄う。この歌を中心とした小コメディーとでも言うべき話。遊女たちが王侯、豪商たちを相手にして金もかなりの力も持ちながら自らの職業には多少の恥を感じていたことがわかる。それでもジャータカ中では最も自由な職業婦人といえる。

#### 4. 毒婦が聖人を陥れる話

㊦ 1 2 0 (Bandhanamokha J.) に登場する王妃がおそらくジャータカ悪女伝の中でも女王格であろう。王には他の女を情欲の目で見ることを許さず、一万六千人の後宮の女との交渉も断たせておきながら自らは六十四人

の家臣と交わる。国境でおきた争乱を鎮めに向かう王に彼女は 1 yojana 行軍するごとに使者をたてて自分の安否を問うてくれるように頼む。王がそのようにすると王妃はこの使者の一人一人と交わりその数は行き帰り 64 yojana 64 人に達した。プロヒタ (Bo.) は都へ残っていたが王妃に誘われても自分はバラモンであること、人妻と交わるのは道にはずれていることを説いて拒む。王妃はプロヒタが自分を汚した、と誣告するが失敗し、今までの不倫も暴かれる。王は激怒するが Bo. が「六十四人の兵隊たちは、王妃に強制されて罪をおかしたのだから許されるべきである。女の性欲はもともと果てしがないもので女は自分でもどうしようもないのだから王妃も許されるべきである。」と説得して、王妃は命拾いする。

№ 472 (Mahāpaduma J.)

枕、Gotama の人気をやっかんだ異教徒 (titthī) 達が美女に頼んで、Gotama をおとし入れようとする。Gotama が女と夜を過した、といううわさを流し、八、九ヶ月たつとおなかに木切れを入れ牛のあご骨で手足を打ってむくんだように見せ、Gotama が説教をしている場所へ行って恨み言を言う。Sakka は四人の神を鼠に変えて木切れを縛っている紐を喰いちぎらせると木切れは女の足元に落ちる。その時大地が割れて地獄の火が女を飲み込む。

本、王子にとっては継母にあたる王妃が王の留守<sup>(15)</sup>に王子に情事をせまる。王子に拒まれた王妃は体に爪あとを作り服を汚して王子が自分を汚そうとした、と帰ってきた王に訴える。王は王子を盗人の谷<sup>(16)</sup>へ落とす。王子は山の精に救われてのちに行者となる。王は王子に再会し、自分の誤ちに気付き王子に帰ってくれるように頼むが王子は山を降りない。王は都へ帰って王妃を盗人の谷へ落とす。

この話は枕、本生譚ともに女に対する処罰が厳しくジャータカ中では例外的ともいえる。

王子は王の留守の間王妃の世話を言いつかって始めて王妃の局に入って王妃と顔を合わせる。このように王妃の局には滅多なことでは人が入らず、王妃が人と会うことも非常に少なかったと思われる。№ 120 の王妃が直接自分のもとへ使いをよこしてくれるように頼むのもそのような事情のためであろう。№ 477 などで行者が王妃のもとへ食事に来ることも聖者としての特別待遇である。№ 531 (Kusa J.) では王の世嗣が生まれなため、王妃を「一般公開」<sup>(17)</sup>する、ということがおこなわれている。よく状況がわからないが我と思わんものは王妃を家へ連れ込んででもよいらしい。着飾った男たちが大勢集まるが、みすばらしい行者姿の老人が王妃の手を引いてあばら屋へ連れてゆき、粗末な寝台に寝かせて気を失わせる。実はこの老人が Sakka でありめでたく二人の兄弟を授かることになる。この話のような例外(実際にあったことかどうかはわからないが)を除いて王妃は公式の行事の際も王に従って人々の前に姿をあらわすことはなかったようだ。

女の恨みについては № 527 (Ummadantī J.) にも語られる。ある豪商

に美しい娘があり、王はバラモンをつかわして王妃にふさわしい相をそなえているかどうかを見させるが、娘の美しさに魅せられたバラモンたちは王にはふさわしくない、とうそを告げる。そのため娘は將軍 (Senāpati) の妻となるが、王が自分を拒んだことを深く恨み、わざと王の前に姿を現わす。王は彼女の美の囚となって我を忘れてかき口説くが將軍 (Bo.) に悟されて恋心を捨てる。

## 5. 人妻が浮気をする話

№64 (Durājataka) は妻の心のうちがわかりかねて悩む優婆塞の話。その男の妻はある時は奴隷のように従順、ある時は女主人のように居丈高で、たまにかねた男が大師に訴える。大師は昔話を語って「女は不貞をはたらいた日は媚びへつらい、しなかった日は傲慢である。不貞、ふしだら、その本性はわかり難く、ようするに気かけなければよい。惚れられたとて喜ぶ勿かれ、嫌われたとて嘆く勿かれ。」と説く。

№65 (Anabhirata J.) はやはり妻の不貞に悩む優婆塞に大師が、「川、道、居酒屋、公会堂、井戸と同じく女も又万人のもの、知恵あるものはその操のもろさを気かけない。」と説く。

№64, 65には浮気の具体的な話はないが、以下浮気とその露呈のさまざまな例である。

№145, 198 (共に Rādha J.) はあるバラモンが自分の留守の間、可愛がっている鸚鵡 (Bo.) に妻を見張らせて妻の不貞を知る話、№198では奥さんに注意をした弟鸚鵡は籠で焼き鳥にされてしまう。

№199 (Gahapati J.) は間男の最中に夫 (Bo.) が帰る。女は機転をきかせて、男に肉の代を取りたてに来たふりをさせるが、夫はうそを見破る。間男は村の長 (Gāmahojaka) であること、雨期の間穀物を食べ尽くしてしまった村人たちが「穀物を取入れたら返す」という約束でこの村の長から雄牛を借り、皆で食べるなど農村の様が窺れて興味深い。

№212 (Ucchitṭhabhatta J.) 情夫に飯<sup>(18)</sup>を食べさせていると夫が帰ってきた。あわてて情夫を納屋へ隠し、その食べ残しの上に又盛りつけて夫に出す。指を入れた夫は飯の上は熱く、下は冷えているのに気付いて間男を見破る。<sup>(19)</sup>

№199, 212とも夫の帰宅で間男たちがふるえ出すのにひきかえ、おかみさんたちの落ち着きぶりは見事である。話の運びに無理がなくしたたかなおかみさんたちの動きを生き生きと伝えていて傑作と思う。

№402 (Sattubhastha J.) 貧しい老バラモンの妻となった娘が若いバラモンと関係し、老バラモンに「召使いが入用だから喜捨を集めてそのための金を作ってきて下さい」と旅に追いやる。千金を集めた老バラモンが、有名な大臣<sup>(20)</sup> (Bo.) の説教を聞きに行つてその知恵を借りて妻の不貞を知り、その情夫が誰かも見抜く話。挿入された頌には「世の中にいくらあっても飽き足らないものが十六ある。海は河が、火は燃えるものが、王は国が、

愚者は罪がいくらあっても……足りない、……女は肉の交わり、着飾ること、子供を生むことをいくらしてもまだ欲しがらる。」とある。

浮気がばれた時の女に対する罰はそれほどひどいものではない。情夫はたたきめして家から追い出し、妻は髪をつかんで殴りつけ「二度といたしません。」と誓わせる。(No 199, 212) No 64, 65では妻が自ら反省して以後浮気は止んだ、としか書かれていない。No 402では「新しい嫁をもらうか。」と大臣にたずねられた老バラモンは「もとの妻が良い。」と答えたのでよく戒めて妻を返してやることになっている。(情夫の方は国から追い出している。)<sup>(2)</sup>

いずれも妻の浮気を見破ってゆく点に謎解きのおもしろさをもたせた話で、「枕」で示された趣旨通りの女性批判とはなっていない。No 402では娘は親の使い込んだ金の代わりに老バラモンに与えられて妻となるので浮気も無理ないところと思える。女房たちの言い分や気持ちはどの話にも一切語られないのであるが。

妻に裏切られた男はどうするか。次の二話が印象的である。

No 481 (Takkarīya J.) は妻の浮気を知ってなんとか相手を殺そうと主門の人身御供にすることを謀るが逆に自分が死にそうな目に会うプロヒタの話。

No 401 (Dasaṅṅaka J.) ではプロヒタの息子が王妃に恋思いをする。心配して尋ねた王はわけを知ると七日間王妃を貸してやることにするが、王妃と若者は意気投合してそのまま異国へ逃げてしまう。王妃を借り倒された王は、傷心のあまり床につく。そこで家臣(Bo.) が喜捨の貴さを説いてその心を慰める。

女の邪悪を語るという趣旨ではあるが、話の重点はお人好しの王様の純粹さにあろう。大臣の図らいで芸人が剣を飲むところを見物した王は感心して「これよりむずかしいことがあろうか。」と問う。大臣が「人に何かを与えようと言うこと。」と答え、王は「自分はむずかしいことがやれたのだ」と思い少し心が晴れる。次にそれよりむずかしいのは、と尋ねると「ことばだけでなく実際に惜しまず与えること」と別の大臣が言うのでまた少し心が晴れる。それよりむずかしいのは、と尋ねるとBo.が「与えた後で後悔せぬこと。」と言う。王は深く反省する。

説話として人を教え悟す効果については疑問の多いジャータカの中で、この話ばかりは美しく思えた。

## 6. 娘の操を試す話

No 102 (Paṅṅika J.) 青物商をしている優婆塞の娘に縁談があった。父親は「うちの娘はいつもうれしげに笑っている。(恋人があるのかもしれない)ふしだらな娘をよそ様へ差し上げたのでは親が後指をさされる。」と思い、娘を試すことにする。草を摘みに森へ連れて行き、突然手を握って耳許にささやく。娘はわっと泣き出し、やめてくれるように言ったので父親は

娘が浄らかな身であることを知って安心し、嫁にやった。この話を聞いた大師が昔も同じことがあって木の精(Bo.)がそれを見た、と語る。

№217 (Seggu J.) も同様の話である。(挿入される頌が少し異なるだけ)

この話を真に受ければ、生娘でない女は口説かれれば実の父親とでも交わる、と見ていることになる。ジャータカの女の色欲に対する見解からはそうであって不思議ではない。

どうしても異様なものを感じさせる話であるが、近親相姦への興味を逆手にとって人の心をくすぐる話と見た方がよいのかもしれない。

「苦しいことから守ってくれるはずの父さんが森であたしを騙します。こんなに深い森の中どなたを呼んで泣きましょか。頼りにしていた父さんが急に乱暴するのだもの」

如何に道はずれたことであるか、水から火を欲しがるといふものだと説くところは、№472の王子が継母を拒絶する場面に似ている。

## 7. 十六娘の垣は出来ぬ、という話

女の操はどうしても守れない、という話が二話ある。

№62 (Andabhūta J.) 王(Bo.) とプロヒタはよくさいころ遊びをしたが、王がこのさいころ唄を歌ってさいを投げると勝負はいつも王のものだった。

川はみんな曲がって流れ  
森はみんな木から成る  
女はみんなすきさえあれば  
人目盗んで、みそかごと

このままでは家が傾いてしまう、と案じたプロヒタはこの唄の例外を作ること考える。「一度でも他の男を目にしたことのある女を守ることはできない」ので、貧しい妊婦を呼び入れて面倒を見てやり、生まれた女の子を女手だけで育てさせ、年頃になると我物とした。<sup>(21)</sup> 王があこの唄を歌った時に、「うちのあの子のほかは。」とつけ加えると今度は王に勝つことができた。王は「プロヒタの家には一人の男だけを守る女がいるのだろう。」<sup>(22)</sup>と臣下の若者にその操を破るように命じる。プロヒタの家は七階建てで七つの楼門があり、男はプロヒタ以外絶対に中に入れない。若者はこの家の小間使いに生き別れになっていた息子だと名乗って近づく。そのうちに恋患いを装って女主人に会わせてくれるように頼み、花籠に隠れて中へ入れてもらう。若者は首尾よく娘の操を奪い、娘も若者と楽しむ<sup>(24)</sup>。王は又さいころ遊びに勝ち、娘の不貞を告げる。プロヒタに問われた娘は「御主人様以外の男には指一本触れられたことがない。」と言い張り、「信じてもらえないなら Saccakiriya<sup>(25)</sup> をして身の明かしをたてよう。」と言う。火の中へ飛び込む寸前に打合せ通り、若者が人だかりから飛び出して来て娘の腕をつかむ。娘は「もうこれで火の中へ入ることはできなくなった。」と言うがプロヒタはまだ自

分を騙そうとするのか、と怒って縁を切る。「やはり女は不貞なもの、どんな大罪をおかしても知らぬ、存ぜぬと堂々と誓いをたてる。二心どころかいくつの心を持つのだから知れない。一人の男を守る女なぞいるはずがない。」と説く。徹底した女性不信であり、それはこのような頌にも表れている。

泥棒女のずるさには何の誠も頼みもならぬ

つかもとすれば魚のように

ひらりひらりと身をかかわす

うそがまことでもまことがうそよ

草をほうばる牝牛のように

いくら喰ってもまだかわく

砂の城よりすぐくずれ

冷たいことは蛇のよう

男をだます甘口は

あの手もこの手も皆承知

しかし、プロヒタの自己本位の犠牲になっている娘が主人を裏切ったところで特に悪いともいえず、話全体の印象は単なる喜劇というところ。Bo.もこの話では高德の士ではない。(ジャータカ中ではBo.は高德というよりはその賢明さ、論理の巧みさ、で讃えられるようだが。)

㊦ 2 6 2 ( Mudu-Paṇi J.) ある王(Bo.) は自分のあとを王女と甥に嗣がせるつもりであったがそのうちに気が変わって二人を引離し、自ら王女を見張るようになる。甥と王女は、乳母を通じて示し合わせ、ある雨の夜、娘が窓の外で(バルコニーのようにになっているのであろう)水浴をする間に、二人で逃げ出す。父王は娘の腕をつかんでいたつもりが、いつの間にか娘は小姓にすりかわっているのに気付く「女はすぐそばに置いて手を握っていても守り切れぬ」と悟って甥と王女を呼びもどし、結婚させて国を与える。

「枕」によれば「女は守りきれぬものだから恋い慕ってみたところで空しい。」という趣旨だが、この話で無茶なのはむしろ父王Bo.である。若い恋人達の頭の良さと勇気が讃えられるはずのところだろう。

## 8. 夫を助ける貞女の話

夫を助け、夫だけを守る殊勝な妻たちの話も少ないながら幾つかある。

㊦ 1 9 4 ( Manicora J.) 牛車で妻の里へ向かう若夫婦があった。その妻は天女の如く花つたの如く( pupphalata ) 戯れるキンナラ女の如く美しく<sup>(26)</sup>、夫婦は一つ心に楽しく暮らしていた<sup>(27)</sup>のであった。王がこの若妻を見染め、なんとか我物にしようと王冠を牛車に投げこませて盗人として捕えさせる。夫の首が落ちようとする時、妻は泣きながら「ここには悪人の手を止める神がないのか。」と叫ぶ。Sakka が現れて王と男の位置を入れ替え、落ちたのは王の首であった。この男がかわって王となり人々は正義の王の現れたことを喜ぶ<sup>(28)</sup>。

㊦ 5 1 9 ( Sambula J.) 癩病にかかった王子が世を捨てて森へ行く決



心をする。その妻は夫に止められながらも付添い森でこまやかな看病を続ける。ある日妻は水浴して夜叉に恋をされ、従うかさもなくば喰ってしまうと脅される。その時 Sakka が現れて妻を救う。いつもより遅く庵に帰った妻は夫にわけを話す。夫は信じない。妻は Saccakiriya をして夫に水をふりかけ、もし私の言葉にうそがないなら夫の病を直したまえ、と言う。果たして夫の癩は錆が酸に洗われたようにきれいに直る。二人は王宮へ戻って王位につくが今だに夫は妻の貞操を疑っている。王妃を無視して他の女たちと遊び呆けるので王妃は嫉妬に駆られて痩せ細る。出家者となった先王 (Bo.) が王妃を哀れみ王を悟す。王は自分の非を知って王妃に詫げる。

Rāmāyaṇa に共通する要素をもつ説話。ただ一度の疑いのために以後何年も妻を無視して他の女と交渉をもつ夫、人一倍夫に尽くしてきながら夫にかえりみられずじっと忍ぶ妻の図は、女の立場の弱さ、妻の貞操に対する厳しさをはっきり感じさせる。浮気なおかみさんたちのしたたかさ、おおらかさ、いいかげんさがここにはない。

しかし浮気妻に対してはその心理がまったく述べられなかった。ただの尻軽女としてしか扱われていなかったのに比べて、ここに登場する貞女は人間としての心の苦しみを先王に向かって打明ける。

- 蓮華の美女に心うばわれ  
白鳥の美声に聞き惚れる  
女の甘さに酔い痴れて  
もう私には別の人のよう
- 金色の裳裾ひきしなつくる手弱女  
地に舞降りた天女とまごうばかり  
あの方の床に眠る美しいその体  
心まで奪い去る姫君達
- もしも願いがかなうなら  
昔のままに森にくらそう  
あの方のため草を摘む楽しさ  
また私だけを慕って下さるうに
- 贅を尽くした美味のかずかず  
光る絹も何になろう  
可愛く思わぬ妻ならば  
首つる縄だけあればよい  
その日暮しの賤の女も  
愛しがられりゃ幸せものよ  
何不自由ないこの身より  
どんなによかろう思われる身は

夫の妻に対する冷淡も今まで信頼してきたものに裏切られたと思う苦しみの表れ、とも読める。夫は Saccakiriya によっても疑いを解かず王宮の豪

勢な暮らしの中でも二人の心は晴れない。善人同志でありながら心を伝えることができずに苦しむ。(肉欲を離れぬ限りは善人も苦しみを免れない、というジャータカ本来の趣旨通りではある。)先王の悟しにあまり説得力がなくどうして夫が心を改めるか、がわからない難はあるが、白黒のはっきりした勸善懲悪<sup>(29)</sup>でない点で近代に通じる要素を持っているのではないか。

しかし、「夫の所有物」ではあっても心の内では夫を馬鹿にして堂々と裏切ってゆく悪女たちと並べるとこの貞女の姿はより男性本位の発想の産物である。ジャータカ中「サティー」の記述はないようだが、「サティー」につながるものでもあろう。

㊦267 (Kakkatā J.)には象の貞女が登場する。象の王子が大ガニに足をはさまれる。仲間の象は皆逃げてしまい、妻である雌象も逃げかけるが、夫に「見捨てないでくれ」と叫ばれるとすぐ引き返す。「決して見捨てたりしません。ずっといつまでも私はあなたの妻です。世界中で愛しいのは唯一人あなただけ。」と励まし、夫を大ガニから救う。

## 9. 夫婦でありながら夫婦でない話

いかに理想的な夫婦でも性的関係を持つ限りは肉欲にとらわれて罪を生む。男女の結びつきの理想を求めてゆくと男女を超えた関係にゆきつく、というのがジャータカ全体の一つの結論らしく思われる。

### ㊦328 (Ananusociya J.)

枕 妻をなくした悲しみに食事もしなくなり、畑も放ったらかしにして墓地をさまようばかりになってしまった優婆塞があった。その男を悟すために大師は昔を語った。

本 裕福なバラモンに一人息子(Bo.)があり、両親は嫁をもらって家を継いでくれるように勧める。息子は「家などいらぬ。父上母上は亡くなったあとは出家するつもりだから嫁はいらぬ<sup>(30)</sup>。」と拒むが何度も頼まれて金で美しい娘の像を作って両親に示し、こんな娘がいたら嫁にもらってもよい、と言う。両親は金の像を車につみ、人を乗り込ませて国中を探させる。ある村でサンミラパーシニーという金の像そっくりの美しい娘を見つける。娘は「尼になるつもりだから」と断わるが両親はとり合わず、像と交換に娘を嫁にやる。二人の意志に反して結婚式は行なわれ、二人は同じ部屋同じ床に休むことになるが、互いを情欲の目で見ることすらなく、二人の比丘、二人の比丘尼のように浄らかに暮らす。そのうちに親たちが死んでBo.は出家を決意し、妻に財産を託そうとするが、妻は夫とともに出家することを願う。二人は家財をすべて喜捨してヒマラヤに入る。ある時、塩と酢を求めて山を降り、ペナレスへ来て王宮の御苑<sup>(31)</sup>に寝泊まりした。サンミラパーシニーはここにいる間に悪い飯を食べて赤痢になる。Bo.は女をお堂に寝かせて托鉢に行き、帰って来てみると、もう冷たくなっていた。死顔がまだ若く美しいので人だかりができて皆が泣いている。Bo.は女を寝かせた同じ台に腰をかけて平気で飯を食いだした。まわりをとりかこんでいる連中に、「この比丘尼

は知り合いか」と尋ねられて、「昔俺の女房だった女だ」と答える。人々が「他人でも泣かずにおれないのになぜ泣きも嘆きもなさらん」と不審がると「なぜ嘆くことがある<sup>62</sup>」とこのような歌をよむ。

ここを離れて賑やかな所へ行ったのに  
なあサンミラバーシーよ、どうして嘆こう  
手元から消え落ちるものを悼むなら  
まず己を嘆くがよい  
ただ死神にひかれて歩くものを  
立っていてもすわっていても  
旅にあっても眠っていても  
まばたくひまにゆけるところ  
別ればかりは確かなこと  
哀れむべきは今ここにあるもの  
逝ったものを嘆くまい

人々は比丘尼の葬式をし、Bo.はヒマラヤへ帰った。

№443 (Culla-Bodhi J.)

枕 気性が激しく怒りっぽい比丘がいて自分の性格を嘆いていた。大師は怒りを鎮めることの大切さを説く。

本 金の像を作る話はないが№328と同じようにして夫婦は行者となる。王宮の庭園で王は比丘尼を見染め、無理に宮殿へ連れ去る。比丘尼は泣き叫ぶが、行者はちらりと一度見たきりもう目もくれない。比丘尼は宮殿へ連れてゆかれて丁重にもてなされ、口説かれても行の大切さを語るばかりで一向に王の意のままにならない。先刻の行者の平静さが気にかかった王は再び庭園へ引返す。行者は「愛欲や怒りなどの感情が如何に害あるものか。」を王に教える。

№458 (Udaya J.)

枕 恋患に悩む比丘を大師が教え悟す。

本 Bo.は王子に生まれる。金の像と妻が登場するところは№328の通りである。王と王妃になった二人はどちらが先に死んでも生まれ変わった所から又会いに来ることを約束していた。Bo.は死んでSakkaに生まれ変わり<sup>63</sup>、ある晩王妃の寝室に現れて夜叉と名乗って口説いたり、金貨の入った壺で誘惑するが王妃は「私の夫は今は亡き王だけ」とうけつけない。こうして王妃を試したあとBo.は自らの正体を明かし王宮を去る。

男性側の超俗ぶりが話の中心であるが、女の方はどうであろうか。№328では、「出家なさるならお伴させて下さい。あなたのそばを離れることはできません。」と夫に頼む。№443では王に連れてゆかれる時に泣き叫んで抵抗している。№458では正体を明かされて、「あなたなしでは生きてけない、ここで私に説教をして下さい。又一緒に暮らして下さい。」とすがってBo.に悟されている。

男の方の執着のなさを際立たせるためにこのように書かれるのであろうし、

女はどれほど身を淨らかに保ってもやはり完全に執着を断つことができない、という見方を示してもいる。

しかし、夫を慕いどこまでも寄添おうとする妻の心の切なさが比丘の男心をくすぐり、比丘尼の共感をよんだことは確かであろう。「本人たちの意志には反して」理想の美男美女が出会い互いを敬って淨らかに暮らす、というのは、「俗」を多分に残した人間なればこそ思い描く夢と思えておもしろい。

特に 64 5 8 で男女としての関係は持たないまま、死後の再会まで約束するところは初心な恋人同志の誓いのようで微笑ましく、王妃が死んで Bo. の侍女として天に生まれる結末も、肉欲をはなれたところでの人のつながり、縁を切に求める気持ちがよくでている。

金の像の話は 64 5 3 1 (Kusa J.) にもみえる。自らの醜さを恥じて結婚を拒む王子が金の像を作る。像にうり二つの王女がみつき、二人は結婚して王位につく。子供が生まれるまでは互いの顔を見てはならない約束なのだが、ある日王妃は偶然王の顔を見てしまい、王を嫌って自分の国へ帰ってしまう。あとを追った王が王妃の危機を救って再び結ばれる。

## 10. 女を思って地獄へ落ちる話

64 1 4 7 (Puppharatta J.)

枕 昔連添った妻が忘れられず、あの女なしでは生きていけない、と訴えた比丘に大師が「おまえは前世でその女のために首を斬られ、女を思いながら死んだために地獄に生まれ変わって苦しんだ。それなのにどうして今更あんな女が恋しいのか。」と昔を語った。

本 カッチーカーの夜祭り<sup>(34)</sup>で町は天上の町のように賑わった。貧しい男の妻が「家にある布をクスンバで染めて晴着をこしらえたい」と言い張り、王宮の倉からクスンバを盗んでくるように男に言う。男は女のためにそうするが、失敗して死刑になる。<sup>(35)</sup>「串刺しにされようと鳥に突つかれようとこたえやしない、嬬に花染めのベベを着せて祭りへ連れて行ってやれないのだけが未練だ。」と女のことを嘆きながら死んだので地獄へ生まれ変わる話。

64 2 9 7 (Kāma-Vilāpu J.) 同じ話だが男は殺される前に鳥に向かって歌をうたう。

- 空ゆくとりよ つたえておくれ  
きれいな足した可愛いやつが  
一人で淋しく待ってるはずだ
- こんなこととは知らないで  
不実を恨んで泣くだろう  
そのことだけが気にかかる
- 鎧と金貨は枕元、カーシー絹もそこにある  
俺のお宝引取ってどうか達者でやってくれ

64 3 4 (Maccha J.) 64 2 1 6 (Maccha J.)

本 ある魚が女魚と戯れていて網に捕えられた。魚は焼魚にされかけても女のことを気にしている。

陸に上がって寒くても、炭火で焼かれて熱くても、嘆いたりなぞするものか。

たった一つの気がかりは、僕が浮気をしたんだと、あの女魚が嘆くこと。

動物の言葉がわかるプロヒタ(Bo.)がこの歌を聞きつけて「この魚は愛欲に駆られて嘆いている。こんな病んだ心のまま死んだら地獄に生まれ変わることは間違いない」と哀れみ、漁師に金を払って買い取る。「もう二度と女にうつつをぬかすのではないよ。」と悟して逃がしてやる。

女の身勝手とその女に最後まで誠を尽す男の哀れを描いて色恋に迷った果ては地獄、と説く。我身より女を思う男の真情、駄々をこねて男を困らせる女の様子の愛らしさに教訓の方はかすんでしまっている、と感じるのは勝手な思い入れだろうか。当時の人たちはどのような思いでこの話を聞いたろうか。

## 11. とりのこした話を集めて

№479 (Kālinga-Bodhi J.) 転輪王(Cakkavattī)を息子に持つ、という予言をうけた王子があり、兄に憎まれて城を出て森にすんだ。ある王女はやはり同じ予言をされたので父王がその身を案じて王女を森に隠した。二人が出会う場面。

王女は花輪を編みながらガンジス河の岸に出る。岸辺に花咲かりのマンゴー樹があって天然のはしごのようになっていた。娘は樹に登り、花輪を水に投げる。花輪は流れを下り水浴をしている王子の髪にからむ<sup>(36)</sup>。王子は花輪の主を探して岸辺をさまよう。歌声を聞きつけて樹に近づき娘をみつける。

「君はいったい何、木の精なの」

「ただの人の子ですわ、お坊さま。」

「それなら降りておいでよ」

「だめよ、お坊さま、私はクシャトリアの娘」

「はくもクシャトリアだ、降りておいで」

「口だけでは信じないわ、クシャトリアなら合言葉<sup>(37)</sup>をおっしゃいな」

二人は互いをクシャトリアと確かめ合い、娘は下に降り若者と交わる。

恋愛場面が美しく描かれているのがジャータカには珍しい。恋もカーストに左右されることが良くわかる話でもある。この二人の間に生まれた子供は王位継承者である証拠の品一印章つき指輪と剣と美しい布を持って王宮へ行き、のちに転輪王となる。

苦行者と王妃の話でも、王妃はバラモンとの床入りの前に「バラモンの地位を捨てなくてはならない」と告げて注意している。遊女が盗賊に恋をすることも遊女がシュードラであることが関わっているかもしれない。

身分違いの結婚についての話もある。

№7 (Katthahāri J.)

枕 Sakka が女奴隷に生ませた娘がある王の正室となって息子を生んだ。王はあとになって王妃の素姓を知り、息子も王妃も低い位に落とした。この事を知った大師が、「王の娘であり、王に嫁し、王の子をもうけたのであるから、その子が世嗣でないわけではない。古には仮りそめの<sup>(38)</sup>卑しい女の腹の子にさえ王位を与えた例もある」と昔の話をする。

本 王が庭園で薪拾いの娘を見染める。娘は王の子(Bo.)を宿したことに気付き、それを告げると王は璽を刻んだ指輪を与えて去る。数年が過ぎ、母子は指輪をもって王宮へ行くが王は認めない<sup>(39)</sup>。そこでBo.はSaccakiriyaをおこなって空中に坐り王に説教する。王は降りてきた王子を腕に抱く。娘は王妃となり、Bo.はのちに王となる。

この話によればカースト違いの結婚が認められたことになっているが、このような例外も男性側が高カーストの場合のみ、と思われる。王が指輪を与える際に、「娘であればこれを金に換えて育てなさい。息子であれば指輪をもって私のもとへよこすように」と言う。息子と息女の待遇の違いが良く出ている。子供がよその子供と遊んでいて「父なしっ子のくせに」とからかわれて家へ駆け帰り、母親に問う様は時代を超えて読む人に伝わる。

№306 (Sujāta J.) は王がなつめ売りの娘を見染めて妃にする話である。王妃となった娘はある時、なつめを見て「あの卵みたいな赤くてきれいなものはなんでしょう、教えて下さいな」と言う。これを聞いた王は「自分が売り歩いてきたものまで忘れたのか。」と怒りだすが、大臣(Bo.)のとりなしで王妃を許す。

「女は位がつけばもとの卑しい身分を忘れてお高くすますようになるもの」と歌われている。

蒲魚で追い出されかけた王妃もいるが気がありながらおぼこを気取って失敗した女の話もある。

№266 (Vātaggasindhava J.) 恋の病で寝こんだ女がいた。友達が心配して相手の男を呼んでくる。男に手をとられると女は、すぐに許したのでは安っぽい女にみられると思い、払いのけて、出てって頂戴、と叫ぶ。男は怒って帰ってしまい二度と来てはくれない。友達も呆れて来なくなる。女は焦がれ死する。この話が枕で本生譚の方は同じ目に会う牝驢馬の話。驢馬が御殿の馬(Bo.)に恋い焦がれ、草も水もとらなくなり骨と皮ばかりにやせてしまう。仔驢馬が心配して御殿馬に頼みにゆく。馬と驢馬が会い、馬は相手の匂いを嗅き出すが、驢馬は「会ったばかりで許すのは安売りのようではないやだ。」と思い、馬の下顎を蹴っとばす。馬は恥ずかしく思って行ってしまう。

古今東西いずこも同じ女心をうつして妙<sup>(40)</sup>。

やはり女心を描いてすさまじい話がある。

ジャータカの女性不信、女性嫌悪はこの話で頂点に達する。

№61 (Asātamanta J.)

枕 恋心をおこした比丘に大師は「女は実に欲深く、不貞であり、その罪

は深い、女ほど卑しいものはない。そのような女になぜ惹かれるのか。」と昔の話をする。

本 Bo. はタッカシラーの町<sup>(41)</sup>のバラモンの家に生まれ、三ヴェーダとすべての技芸を修めて名高い師匠になった。年老いた母を自分の手で世話していたが人々はそのことを悪く言った。そこで森に入って庵で暮らすことにした。タッカシラーの町にいた頃の弟子が訪ねてきて「厭わしきものの巻」を修めてくるように母に言われた、と述べる。師匠は母親の言葉の真意を悟り、女の罪深さを教えることにする。弟子に自分（師匠）の母親の世話をするように命じ、体を洗ってやりながらその美しさを賞めるように言う。老婆は百二十歳で目も見えないのだが、弟子が毎日美しさを賞めるので、「この男は私が欲しいのだ。」と思い、邪魔な息子を殺すことを決意する。弟子は師匠にこのことを告げる。師匠の言葉に従って弟子は老婆に斧を渡し、手引の綱をはる。母親は綱にすがって息子の寝台までゆき斧をふりおろす。斧が木にあたる音がして木像だと気付く。Bo. が後ろから「何をしておられる、母上」と声をかけると、「はかったな」と一声叫んでそのまま息絶える。弟子は家へ帰り、このような歌をよんで両親の願い通り出家する。

貧婪なるは女 その情欲に果てはない  
愛欲の囚となれば 神をも怖れぬ無分別  
ものみな焼き尽くす炎のように女の業は恐ろしい。  
女を遠ざけ森で一人心静かに暮らしてゆこう。

「このように女というものは実に強欲で罪深くその心は卑しい。この年になっても好心をおこし、情欲の虜となれば孝行息子を殺すことさえ図るのである。」と老婆に対して述べられている。始めは家を継ぐつもりであったのに、老婆の業の深さを目のあたりにして女嫌いになり、出家する弟子の気持ちはよくわかる。

それにしても実母に対する師匠の仕打ちはあくどすぎ、残酷の最たるものであろう。孝行息子で老母の面倒をよく見ていたこと、老母の寿命がその日に尽きるのを前もって知っていて計略にかけたことなど弁解はされているが親を殺す以上の大罪と思える。

老母の受難物語がもう一つある。嫁の姑いびりの話である。こんな話を作ったのは嫁と気が合わず尼になった老婆ではなかろうか、と思えるほど実感がよく出ている。

㍻ 4 1 7 ( Kaccāni J. )

枕 熱心に老母の世話をする優婆塞がいた。「嫁はもらわない、母親が死んだら出家をする。」と言っていたが、母親は勝手に嫁を探してきて結婚させる。初めこそ嫁は夫の真似をしてよく母親に尽くしたが、そのうち老母が邪魔になり追い出そうと企てる。姑に出される食事は熱すぎたり、冷たすぎたり、塩辛かったり逆に味がなかったりするようになる。体を洗う時は背中に冷水をかけたり、煮湯を浴びせたりする。寝台に蚤がいれば自分の寝台の蚤まで姑の寝台の上で払い落とす。老母がこういうことで文句を言うと、「い

ったいどうしたらお気に召しますの。」としおらしく泣いて見せ、近所の人には「うちの義母はむずかしい人で文句ばかり言われてます。」とこぼす。家の中に痰やら白髪やらをばらまいておき、夫に叱られると母親のせいだ、と言い「お母さまは私が、家の中を汚さないようお願いしたら『人を馬鹿にして。こんな性悪女とはいっしょに暮らせない』とお怒りになるのよ。私をとるか、お母さまをとるか、どちらかにして下さい。」とせまる。しかし夫は「母は年をとって体も弱っているから面倒を見ないわけにはいかない。おまえはまだ若いのだから実家へ帰るがいい。」と言ひ、妻は出戻り女になるのはいやだ、とそれから心を入れ換えて姑に尽くすようになった。

この話をこの優婆塞から聞いて大師は昔話をした。

本途中までは枕の話のままだが、妻の言葉に夫は母親が悪いのだ、と思ひこみ、「母さんのせいで家の中がうまくゆかない。どこへでも好きなところへ出てって下さい。」と老母を追い出す。老母は泣きながら知り合いの家へ行き、そこで働いてどうにか暮らした。姑が家を出てから嫁に子供ができた。嫁は、「お母さんがいる間は子供に恵まれなかったのに、あの人が出ていったら急に子供ができた。」と夫や近所に言いふらした。そのうわきを聞いた老母は「さんざん私をいじめながら子供に恵まれて家もうまくゆくなんで『法』は死んでしまったのにちがいない。<sup>(42)</sup>」と嘆き、『法』の葬式をしよう<sup>(43)</sup>と思ひつた。

ごまと米と小壺、匙を持ち、白い着物を着て焼場<sup>(44)</sup>へ行き、三つのされこうべで竈を作り火をつけた。川で体と服を清めてから、髪をふりほどいて、米を洗い出した。Sakka(Bo.)がこの様を目にしてバラモンの姿で老母の前に現れる。事情を聞いたあとで自らの正体を明かし、私の力で嫁とその子を灰にしてしまおう、と言う。母親は、可愛い孫にとんでもない、そんなことはしないでくれ、一緒に仲良く暮らせるのだったらうれしいが、と頼む。Sakkaは「あなたは正しい人だ。」と賞める。Sakkaの力によって息子夫婦は自分たちの非を悟り、母親を迎えに来る。夫婦は母親に許しを乞ひ家へ連れ帰るともうそれから是一家仲良く暮らした。

姑側に味方して書かれてあるので、この話だけで当時は嫁の立場の方が強かった、などと言うわけにはいかない。いつの世も同じ、と感心させられる。嫁いびりの話はジャータカにはないようである。

母と妻の板ばさみになる夫が衰れだが、兄弟と夫と子供のうち誰をとるか、と尋ねられて兄弟をとった女の話がある。

No 67 (Ucchaṅga J.)

枕 三人の男が無実の罪で捕えられ、王は死刑を命じた。ある女が泣きながらやってきて「私の夫と兄と子供を許して下さい。」と王に訴える。王は三人のうち一人だけ許してやろう、誰をとるか、と尋ねる。女は「私はこれからの人生で別の夫を見つけることができますし、息子も生まれるでしょう。けれど兄弟だけはみつかりません。両親はとうに死んでしまいましたもの。」



と兄を返してくれるように願う。王はこの答えに感心して三人とも許してやる。

本 枕と同じ話であり、女はこのような歌をうたう。

息子はいつか手に入る  
夫は道ゆく人の流れにみつけましょう  
幾千の国をめぐったとて  
兄弟ばかりはみつからぬ

この話をもって当時の女性が夫を軽んじた、と言うことはできない。あくまで理屈のおもしろさを楽しむための話であり、むしろ女の返答が意外であるから話になるのである。

男を喰い殺す夜叉女の話もある。

№196 (Valāhassa J.)

本 セイロン島に夜叉女の町があった。船が流れつくと人間の女のようなふりをして「妻にして下さい。私達の夫は海で死にました。」と誘いかけてはそのうちに喰ってしまう。ある時、空を飛ぶ馬(Bo.)が現れて男たちを救う。

「妻にしてくれ」ともちかけて鶏<sup>(45)</sup>を喰おうとする牝猫の話もある。猫と鶏(Bo.)のやりとりが愉快。 №383 (Kukkuṭa J.)

- 白い羽毛に身をつつみ  
とさかのゆるるあんたって  
ほんとにいかすおんどりね  
ちよいとそこからおりてらっしゃい  
お代は特にいただかないわ(猫)
- あんたは四ツ足おいらは二本  
こりゃ残念だね かわい子ちゃん  
とりとけものじゃいっしょになれまい  
だんなはよそでめっけておくれ(鶏)
- あたいは一生あんたのもんよ  
させてあげるわ いい思い  
神に誓ってめおとになるか  
日陰の女でくらそうか  
どうでも好きにしてちょうだい(猫)
- やいこの鳥喰い婆あの吸血女のにわとり殺しのどろぼう猫! 神に誓ってが  
聞いて呆れらあ!(鶏)

これも女に近づくな、という教訓付きの話である。

お伽話を仏教説話に変える苦心の跡がしのばれる話を二題とりあげて最後としよう。

№ 380 ( Āsamkā J. ) ある行者がはすの花の中に美しい女の子を見つけ「ふしぎ姫 ( Āsamkā ) 」と名付けて大事に育てる。姫の美しさをうわさに聞いた王がやってくるが、行者は娘の名がわかったらやってもよい、と言う。三年目に王はやっと「ふしぎ」という名を言い、娘を連れ帰って末永く幸せに暮らした。

本来めでたし、めでたしのお伽話にすぎないがジャータカでは王に恋の馬鹿馬鹿しさを嘆かせて例のように愛欲と女の恐しさまで説くのである。「私が三年も恋にうつつをぬかしている間に、連れてきた兵士や象は飢えや寒さでたくさん死んだ。私の国もすっかり乱れてしまったのではないか。私は何をしてきたのだろう。」

№ 263 ( Cūḷapalobhana J. )<sup>(46)</sup> 生まれつき女を恐がってなつかないので一切男手だけで育てられた王子があった。遊び女など一切近づけずただ黙想ばかりしている。困りはてた王にある賢い踊り子が私がやってみましょう、と申し出る。黙想の部屋の前で美しい声で歌をうたい、王子は次第にその歌に惹かれるようになり、ついには娘と結ばれる。ここで終わったのではジャータカの趣旨に反するので、その後日談がつづく。恋が嵩じて恋狂いとなり王子は都で殺傷沙汰をおこして城を追われる。この先は第一章で述べたとおり。王子は森にくらすうち、女がいかに害あるものか、を悟って娘を去らせた、とはまことにジャータカらしい結び。

## おわりに

ジャータカは御覧のように女人性悪説を説く。

仏道を志すからには女に迷ってはならぬ。

説話を聞いたら、それで女が嫌いにならなくては困る。恋しくなって家へ戻られたら僧団がつぶれてしまう。だから、説話の中では女は悪者である。

そういう女に対してでも「怒る」ということはこれ又仏敵である。「女はもともと性根が曲がっていて無節操なものだから、本気でつきあうと苦勞するだけ損ですよ。なるべくかかわりあいにならないようになさい。悪いことをされても哀れなやつらじゃと思うておればよい」ということになる。

このような女人性悪説がどの程度、当時の社会一般にあてはまるか、当時の人々の女性観とのずれ具合を云々することはここではできない。

しかし、ジャータカを書留めた者たちが無意識に書き流していくことばを丹念に見ていけば当時の常識はある程度知れよう。

その作業をする余裕はないが、一つ顕著なのは女が「もの」であることだろう。ジャータカの時代に限ったことではないが。

女性はその意志を問われることなく親から花婿に「与えられる。」王から行者へ「贈られ」たり、臣下に「貸し」てやる王までいる。甚しきに至っては、妻を「非常用食料」として喰う王子達すら登場する。

ジャータカにも稀に貞女が登場する。夫に尽くすのを何よりの徳と考え、夫に愛される以外自分の幸わせはない、と信じて疑わない型通りの貞女である。「もの扱い」に「貞女」が加われば、型紙に合わせて体の方を裁断されることになる。「あらゆる女は妖婦である」と敬遠された方がまじだろう。

女性観はどうであれ、女は生きて動いている。

ジャータカの中で女たちはよくも悪くも(たいがいは悪いが)心のままにものを言い、動いてゆく。

にぎやかに生きてるのがよい。

## 註

- (1) ㊦は原本説話番号。  
J. は Jātaka を略す。
- (2) Bodhisatta 菩薩、仏陀の前世の姿。以下 Bo. と略す。
- (3) あるいは女の蔑称か。
- (4) ㊦66 (Mudulakkhaṇa J.) にも女に使われる行者の話がでてくる。  
やはり、買物に行かされたりしている。
- (5) Sakka 地上のできごとを取り締まる神(の地位)としてジャータカ中に登場する。地上に不正があると、その台座が熱くなり、救出に向う、という正義の神でもあるが、ここにあるように時には、聖者を妬んで悪事も行なう。Bo. が生まれ変わってこの地位につくこともある。
- (6) Visabhāgāramṇa "特別なもの" というのが直訳。

Rhys Davids の辞書では、pudendum muliebre 女陰の婉曲表現かと思われる。

(7) 行者たちが山を降りる理由はほとんど「塩と酢をきらしたので手に入れるため」と書かれている。No. 251, 431, 328, 443, 等。

(8) manussānaṃ vaccakuṭṭikiccaṃ sādhayamānaṃ ekam  
chadditagehaṃ dāpesi

(9) lokadhammaṃ sevitvā.

(10) Takka butter milk with 1/4 water とある。

(11) ukkaṇṭhita (> ukkaṇṭhati 首を長くする→切望する、餓える)

又は Kilesa (情欲) をおこす、と表現される。

(12) 二度を一度に減らして願いごとの成就を祈る。

(13) uyyāna, uyyānakilaṃ kīlitvā とある。

(14) devatā 山や木等に宿る神(精)で、たいした力は持っていないようだが、人間とは様々なかかわり方をする。

山の場合これに向かって願をかけるということがよく行われ、願いがかなえばお礼に供物をささげることになる。

No. 419, 193 ではお礼参りと偽って相手を山頂へ誘うのである。

(15) 王が国境でおきた争乱を鎮圧しに行ったすきに、というのがこの種の話の御膳立てである。(No. 66, 120, 251, 431, 472 など)

(16) corapapāta 罪人をつき落とす刑場かと思われる。

(17) rājanivesanā otaretvā vissajjesi.

(18) カレーをそえた熱い飯。

sūpabyañjana sampannaṃ uṇhabhataṃ.

(19) この話では Bo. は物乞いで暮らす貧しい芸人(nataka)であり、この家の戸口で情夫の食事の残りをもらうために待っている。帰ってきた旦那にさきほどの様子を打明けたために浮気がばれる。

(20) amacca アルタ、ダルマを王に説教する役目の大臣。王の相談役でもある。

(21) これと対照的な結末が No. 191 (Ruhaka J.) に登場する。

プロヒタが王から美しい馬を賜わり、人々に馬の美しさを賞められた。ところがその妻は、「馬が美しいのは馬飾りのせい。あなたも馬飾りをつければ王や人々に賞められる。」と言い、プロヒタはその通りにして笑いものになる。妻は夫が帰る前に宮殿へ逃げる。王は妻を許すように悟して「切れた弦も直せばもどおり、妻を許して怒りを鎮めよ。」と言うが、「樹皮と職人がある限り新しい弦はすぐ買える。別の女を娶ろう、今のはもうたくさんだ」と別の女を妻とする。

(22) vayapattakāle tam attano vase ṭhapesi

本妻ではなく妾としておいたものだろう。

(23) imassa ghare ekapurisakāya ekāya itthiyā bhavitabbam

- ②4 踊りたいから、とバラモンにヴィーナを弾かせ、恥ずかしいから、と目かくしをさせる。「ちょっとおつむをたたいてもいいかしら。」と言うと色好みのバラモンは「ああ、いいよ。」と答える。そこで隠れていた若者が思い切り頭を殴り、痛みに耐えかねたバラモンは娘に手をかしてくれ、と言う。娘の手をさすって「こんなやわらかい可愛い手が打つとなるとあんなにきついものかな。」と嘆息して頭のこぶをなでる。こんな場面の他にもさまざまな笑いの種をこの話は用意している。
- ②5 *Sacca-kiriya* 「私の言葉が真実ならばこの火は私を焼かないでしょう。」と唱えて火に入る。このようにして自分の言葉を証明する行為を *saccakiriya* と言い、行なうことはまちまちで何でもよい。王のさいころ唄もそうだが「真実を言うこと」自体に絶対の力が宿る、とされていた。真実を言えばその真実の力で奇跡がひき起こされるのである。
- ②6 美女はふつう天女のように (*devaccharā viya*) 美しいとあり、又キンナラの優美をそのまま女にしたような (*Kinnaralīhāya vasamānāya*)、風から守られて大きく輝く炎のように (*nivate jalamānā dīpasikhā viya*) などとも表現される。
- ②7 *Pamodamānā ekacittā samaggavāsam*
- ②8 「王が悪い王であれば天候不順で飢饉になる」とされる。
- ②9 同じ貞女ものでも ㊦ 194 などはその典型といえよう。時代的にどちらが古いか、ということは言うことができないが。
- ③0 ジャータカにおいてはこれが出家の仕方の理想であるらしい。一家の主として暮らして晩年に(特に白髪をみつけて出家する王の話などがある。)出家するのは普通のことであるが、早くから仏教に帰依しようとする青年は両親の存命中は家に在ってその世話をし、両親共に亡くなった後に出家するべきらしい。妻を捨てて出家することはむしろその執着のなさを賞められることになる。成年していない息子は連れて出家する話が多い。
- ③1 *rājuyyāna*. 王所有の庭園であるが、一般の人々の出入りも自由で公園に近いものだったと思われる。人々が遊びに訪れたり、物売りが出入りしたり、行者たちが寝泊まりするのにも使われる。王はこんな場所で一般の人々と接したものらしい。
- ③2 人が死んだ時に泣かないのは良いことであるらしい。  
㊦ 354 (*Uraga J.*) ではバラモンの家の息子が死ぬが、家族はだれも嘆かない。その徳によってその家はサッカより富を授かる。反対に死を嘆きながら死ぬと地獄へ生まれる。(㊦ 147, ㊦ 34 次章)
- ③3 「Bo. は *Sakka* となって7日は王妃との約束を思い出さなかった。これは人の世の700年にあたる。当時の人間の寿命は、一万年であった。」
- ③4 *Kattikarattivāraḥaṇa*.
- ③5 この話では Bo. は大気の精 (*ākāsaṭṭhadevatā*) として生まれているが話の筋にはなんらかかわり合いがない。

登場人物がどれをとっても Bo. にはふさわしくない時にはこのような傍観者の位置を与えた、と見られる。

(36) 男が河で女の持ちものを拾いその娘を探し出して妻にする、という話はかなり古い、普遍的なものではないか。

(37) *Khattiyamāyaṃ*.

(38) *muhuttikā* temporary wife とある。

(39) この話は「シャクンタラー姫」の話に共通する要素を多くもつ。

(40) マールティアース、樋口勝彦訳

女に、

ガルラは僕に気があって許す気がない。彼女は気があって気がないのだから、彼女はどういう気なのかわからない。

大岡信「詩への架橋」より引用。

(41) *Takkasilā* 良家の子弟はこの町で師匠について三ヴェーダとその他すべての技芸 (*sabbasippā*) を学んだ後、家へ帰って妻を娶り家長期に入る。

(42) "imasmin loke dhammo mato bhavissati"

(43) "dhammassa matakabhattaṃ dassāmi"

(44) *āmakasūāna* 悪臭のただよう火葬場、の意と Rhys Davids の辞書にある。

(45) 野禽のにわとりである。

(46) № 507 (*Mahāpalobhana J.*) も同じ話であるが、頌ばかりで語られてゆく。